

第 1513 回 (7 月 30 日)

ニュージーランドの農業

金 井 道 夫

1991 年 2 月 4～9 日、ニュージーランドで開催された国際農業経営学会 (International Farm Management Association. 略称 IFMA) 主催の第 8 回世界農業経営学会議 (8th World Farm Management Congress) に参加し、ニュージーランド農業を見る機会をえたので、同会議の概要と同国農業の現状と問題点について報告した。

① 会議の概要

会議は、4～6 日が、北島のパルマーストン・ノース市のマッセイ大学を中心に、7～9 日が、南島のクライストチャーチ市のリンカーン大学を中心に、それぞれ行なわれ、発表、フィールド・トリップ、パーティ等多彩な行事があり、また、前後に見学ツアーが行なわれた。参加予定者リストによると、参加者は 22 カ国、255 人に上り、湾岸戦争中にもかかわらず、このうち大半が参加したのと思われる。国別の参加者は、地元のニュージーランドについて、オーストラリア、アメリカ、デンマーク (前回開催地) が多く、開発途上国からは、国数、人数とも少なかった。日本からは 5 名が参加した。

発表は、計量モデルを使った分析は少数派で、農家経営あるいは農民教育・普及などを扱った記述的分析が多く、参加者も、研究者は別としても、行政官は少なく、農民、農業コンサルタント、普及員などが多く、全体として、国際農業経済学会議に比べ、より具体的に農家レベルに近い内容であった。

会議は、3 年に 1 回行なわれるが、今回は、ハンガリーで行なわれる予定である。

② 農業の現状と問題点

1980 年代後半からのニュージーランド経済は年率 2% 未満という低成長 (マイナスの年もある) を続け、財政赤字削減のために、

民活・民営化が進んでいる。農業も、一次産品価格の低下の影響をうける一方、農業補助金の大幅な削減をうけて、再編が進んでいる。

輸出に主点がある農産物を部門別にみると、羊と肉牛を合わせた飼養頭数 (両者はエサをめぐって競合関係にある) が 80 年代初頭をピークに急激に減っており、中でも、相対的に不利になった羊の減少が著しい。ラム・マトンのそれぞれの重要輸出先である中東・ソ連の動向が憂慮されている。

酪農は、農家・乳業会社ともに減って、再編が進み大規模化しつつある中で、輸出の中心である粉ミルクとチーズは輸出が増え、粉スキムミルクとバターは、一時増えたが最近はややのび悩んでいる。

畜産で近年急激にのびているのは鹿で、これは毛皮と肉の生産のためだけでなく、角が薬の原料として、中国や韓国に高く売れるためである。

山羊ものびている。山羊は、毛を取るのが主だが、肉も食べ、肉の半分は輸出されている。しかし、肉の主要な輸出先である中東の動向が憂慮されている。

果樹では、最も重要な輸出品であるキウイフルーツは、生産・輸出量ともにのびているが、他の国の生産ものびているため、生産量 1 位の座を EC に奪われるに至っている。

りんごは、生産・輸出ともにのびている。また、なしは、洋なしのみならず、日本なしも市場に出ている。そして富士・世界一・豊水・新水・幸水といった日本産の品種も積極的に取り入れられている。

総じて、ニュージーランド農業は、保護がほとんどない中で、積極的に新作目・新品種を導入して事態に対応し発展していく力強さを持っていると思われる。